「縮図」①

報告者：西澤忠志

1. 梗概

本章は、加藤周一が第一高等学校（以下、一高）に在学した最後の期間である 3 年生（1938～1939 年）の時期に起きた一高寄宿寮内での出来事と、それに対するインテリ（一高生）たちの態度を通じて、一高寄宿寮をインテリと同時代の社会とが乖離、あるいは対立する「縮図」として描写している。加藤周一が在学していた昭和 10 年代の一高生は、同時代の社会情勢と距離を置きつつ、自身の信念に基づいて社会で使われていた言葉を論じる、独立した気風を持っていた。これはマルクス主義に代表される、同時代の「世界（より正確に言えばヨーロッパ）」とつながりを持っていた文芸や思想を受容することによって得たものである。こうした態度は同時代の社会とのつながりを断ったうえで行われたものではあるが、同時代の社会で使われていた言葉を「正確に」見定めようとする上では大いに役立った。これが実践されたのが、政府による戦時標語に対する態度や横光利一との座談会においてである。
加藤はこれらの体験を通じて、思想的根拠を持ったうえで、その言葉を正確に理解しようとする、同時代の社会を外部から論じる際の視点（「高みの見物」）を得た。それと同時に、加藤は自身の思想と社会とのズレを自覚することとなった。

2. 全体の構造

・「駒場」～「縮図」…1936 年 4 月～39 年 3 月、一高理科乙類に在学中（17～20 歳）
・「二章ごとに関連のある話題が取り上げられている」という視点に従えば、
　・「高原牧歌」…軽井沢（追分）で過ごす人々
　・「縮図」…東京（第一高等学校）での学生たち
　→いずれも、**同時代の社会と距離をとった同年代の人々**
・「駒場」「戯画」「縮図」までの一高での生活を記述した中での位置づけ
　・「駒場」…庭球部に所属していた時期の生徒（上級生）とのつながり（1、2 年生）
　・「戯画」…教師とのつながり（1～3 年生？）
　・「縮図」…文芸部に所属していた時期の生徒（同級生）とのつながり（3 年生）
　→より親しい人々とのつながりに、視点が移る

3. まとめ

第 1 パラグラフ（旧版 148 頁、改版 167～168 頁）

> 三〇年代の末に、第一高等学校の寄宿寮は、日本の社会の縮図であった。そこには行政機関に似た自治寮の委員会があり、その仕事に関心をもつ少数の人々と、ほとんど無関心な大衆があった。形式的な民主主義的制度と実際上の官僚支配。寮生の多くは、一人一人が孤立していたのではなく、小さな共同体――運動部に典型的に代表されていたような――に属し、その共同体の内部では、指導者と他の成員との上下関係がはっきりしていた。原則として、個人の利害に優越するとされた共同体の目的は、しばしば漠然としたものであり、どこまでが目的で、どこまでが手段であるのかさえあきらかでなかった。

1. 三〇年代の末に、第一高等学校の寄宿寮は、日本の社会の縮図であった。

→この章の結論に当たる

先に結論を紹介し、その過程を説明する「倒叙」の形式を使用することで、読者に内容を期待させることを意図してか？

2. そこには行政機関に似た自治寮の委員会があり、その仕事に関心をもつ少数の人々と、ほとんど無関心な大衆があった。形式的な民主主義的制度と実際上の官僚支配。

・一高内での二項対照的な存在

「仕事に関心をもつ少数の人々」⇔「ほとんど無関心な大衆」

「形式的な民主主義的制度」⇔「実際上の官僚支配」

※寄宿寮成立までの過程については、「駒場」の章の講読会レジュメを参照

レジュメの URL：http://www.ritsumei.ac.jp/research/center/kato_shuichi/

- 「自治寮の委員会」＝一高寄宿寮での自治組織の一つである「寮委員会」を指す
- 一高の自治組織

・寮生によって制定された「寮内規約」の下、立法・決定機関としての「総代会」、寮委員を中心とする行政機関としての「寮委員会」によって寄宿寮を運営[1]

- 自治の目的…「日本社会の指導者となるべき社会的責任と地位の自覚、生徒同士がその目的へ向かうために切磋琢磨すること[2]」

→「寄宿寮」の運営を通じた、将来の組織運営を担う人材の育成が目的となる

- 「総代会」、「寮委員会」、「寮委員」の役割

・「総代会」…寮の各部屋の代表者で構成され、すべての寮生にかかわる問題を決定する[3]

議長、副議長は寮生の中から選出される

---

[1] 一高自治寮立寮百年委員会編『第一高等学校自治寮六十年史』一高同窓会（1994）22 頁

[2] 筧田知義『旧制高等学校教育の成立』ミネルヴァ書房（1975）

[3] 隅谷三喜男『激動の時代を生きて ：一社会科学者の回想』岩波書店（2000）14 頁

例：紀念祭の内容、寮内の衛生環境改善の決議、食堂の値段の決定…**寮生にとって身近な問題**
・「寮委員会」…個別の寮生にかかわる問題を週 1 回行われる会議で決定
例：寮生の不当な行為に対する謹慎あるいは退学処分の決定…**寮生個別の問題**
　　寮委員会の決定を学校側が追認する場合も[4]…強い権限を持つ
・「寮委員」…寮委員会での決定や寮内規約を、分担して実行する
例：風紀点検委員…学内における風紀の取締
● 誰が運営に参加していた？
・寮委員…各寮の部屋から選ばれた一高生
・総代会の議長は、（選挙では）前年度の副議長から繰り上げる形で任命
→**一部の学生が中心になって自治が行われる**
● 自治に対する反応…ほとんどの生徒が無関心？
　・直接、学生が自治に参加できる総代会の正副議長選挙の投票率…半分以下
　例：1936（昭和 11 年）度の議長選挙[5]…有権者（1 年生除く）496 名
　　投票者数　193 名（棄権 4）
　　得票者数　189 名
　　投票率　約 40%
　→**「ミニ国家」としての自治寮**…「総代会」＝国会、「寮委員会」＝委員会、「寮委員」…国会議員
　「形式的な民主主義的制度」＝「総代会」
　「実際上の官僚支配」＝「寮委員会」
➢ **現代の政治をめぐる状況を示す存在としての「自治寮」**

3. **寮生の多くは、一人一人が孤立していたのではなく、小さな共同体――運動部に典型的に代表されていたような――に属し、その共同体の内部では、指導者と他の成員との上下関係がはっきりしていた。**

● 「小さな共同体」の説明…運動部（庭球部）での体験に基づく
（『朝日ジャーナル』掲載時には具体例が書かれる）
「羊の歌 14　縮図」『朝日ジャーナル』1967 年 2 月 12 日号、112 頁
　たとえば対三高の試合に勝つことが目的で、寝食をともにすることがそのための手段であるのか、寝食を共にすること自身に意味があって、対三高戦はその口実にすぎないのか、だれにもよくわかってはいなかった。
● 庭球部での体験…「駒場」にて解説
→精神主義を尊ぶ風潮

4. **個人の利害に優越するとされた共同体の目的は、しばしば漠然としたものであり、どこまでが目的で、どこまでが手段であるのかさえあきらかでなかった。**

---

[4] 隅谷三喜男『激動の時代を生きて：一社会科学者の回想』岩波書店（2000）14 頁
[5] 『向陵誌　駒場篇』一高同窓会（1984）35 頁

・「共同体」＝小さな共同体（運動部）
・「手段と目的」の曖昧さに対する問題視は、世界の構造には一貫した「秩序」があるという、幼少期から持っていた加藤の認識[6]に基づくと考えられる
・「手段と目的」との関係は、後の加藤による評論にも取り上げられる
例：『私にとっての 20 世紀』
目的…文学によって決まる、手段…技術が提供

> いまはもちろん科学技術の時代ですけれども、手段と目的は混合しないほうがいい。科学技術がいくら発達しても、その目的は社会にとても個人にとっても決まってこないと思う。自ら考えて生きていこうとすれば、考えるときには科学技術は助けてくれない。文学が助けてくれると思う。役立つかどうかではなくて、そもそも人生に意味があるかどうかが文学的問題でしょう[7]。

第 2 パラグラフ（旧版 148～149 頁、改版 168～169 頁）[8]

> またそこには報道機関に相当するものがあり、文壇に相当するものさえもあった。週刊の新聞が出ていて、読者は寮生の全体にわたっていたが、その執筆者は、少数の人々に限られていた。また年に数回の「校友会雑誌」には、もっと少数の学生だけが、小説や論文を書いていた。雑誌は学生に無料で配られていたけれども、実際の読者はおそらく少かったにちがいない。「校友会雑誌」は、ほとんど編集者自身とその周辺の人々の同人雑誌に似ていた。私は三学年のはじめに、庭球部を退いて、その編集者の一人になった。そしてその頃の駒場でものを書き、あるいは将来書くことに関心をもっていた学生のほとんどすべてを知るようになった。彼らのなかには、弾圧の時代に生きのびてきた少数のマルクス主義者がいた。学校のなかにもはや左翼の組織はなく、彼らが学外の組織に属していたかどうかも疑わしい。おそらく孤立した理論家であったのだろう。そのひとりは、戸坂潤を尊敬し、大森義太郎を愛読し、三木清に強い関心をもちながら、文壇の全体と京都の哲学者たちを徹底的に軽蔑していた。またもっと教壇的な学問に熱心な学生もいた。一部の学生は、ドイツ観念論の煩瑣な概念を操作しようとしていたし、また別の学生たちは、まえにも触れたように、「万葉集」を原文について読もうとしていた。また詩人もいた。立原道造や中原中也や宮沢賢治に傾倒し、前世紀末今世紀はじめの頃の欧洲殊にフランスの詩を読んで、誰にもわかり難い詩を書いていた。小説家には、徳田秋声を祖として、いわゆる「自然主義私小説」を試作する者があり、太宰治を範として、酒と女に溺れ、または溺れるかのように構え、折にふれてその見聞を綴ろうとする者があった。またあるいは「人民文庫」と「文学界」の双方を気にしながら、西洋の小説を読み漁り、そのどこかに小説の理想をもとめようとする者もいたのである。

■　構造…学生たちの群像が提示される
※それぞれの学生が誰なのかは不明

---

[6] 鷲巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったのか：『羊の歌』を読みなおす』岩波書店（2018）90 頁
[7] 加藤周一『私にとっての 20 世紀』岩波書店（2000）227 頁
[8] マーカーは発表者によるもの

1.　またそこには報道機関に相当するものがあり、文壇に相当するものさえもあった。

●　「報道機関に相当するもの」＝『向陵時報』

・『向陵時報』（1930～1944、1946）

『寮報』『向陵新聞』を前身とし、寄宿寮内で発行された隔月発行のタブロイド紙。

・自治寮のニュース（学内のイベント、運動部の試合結果）、文芸作品（詩、小説）、評論（文学批評、劇評、映画評、音楽批評）を掲載

・学生のみならず教員や卒業生の評論や文芸作品も掲載

●　「文壇に相当するもの」＝『向陵時報』と『校友会雑誌』に文芸作品を投稿した人々？

・一高内の「文壇」

『向陵時報』で掲載された後、本格的な文芸作品、評論は『校友会雑誌』に投稿する風潮[9]から、『向陵時報』に投稿した学生の中から、文芸部員の推薦によって、『校友会雑誌』に掲載

・文芸活動の出発点として校内メディアが機能する[10]

2.　週刊の新聞が出ていて、読者は寮生の全体にわたっていたが、その執筆者は、少数の人々に限られていた。

「週刊の新聞」＝『向陵時報』か

●　『向陵時報』の読者層

・寮内に配られたため、一高生に限られる

●　『向陵時報』の執筆者層

・文科、理科関係なく、『向陵時報』の部員と文芸に関心のある学生に限られる

3.　また年に数回の「校友会雑誌」には、もっと少数の学生だけが、小説や論文を書いていた。

●　『校友会雑誌』（1890～1944）

・校友会文芸部が編集し、年 2 回発行した校内雑誌

文芸部を通じて全国の旧制高校に送られ、一高の『校友会雑誌』を手本に全国の高等学校でも発行

●　『校友会雑誌』の投稿者層

・基本的には文芸部の関係者に限られる

文芸部員の周辺で執筆者が動いているため「『校友会雑誌』というよりも『文芸部雑誌』[11]」と呼ばれる

4.　雑誌は学生に無料で配られていたけれども、実際の読者はおそらく少かったにちがいない。

●　『校友会雑誌』読者層

・基本的には旧制高校生

しかし現存している冊数が少ないため、そこまでいなかった？

---

[9] 『向陵誌　駒場篇』一高同窓会（1984）35 頁

[10] 一高の『校友会雑誌』や『向陵時報』で文芸活動を始めたのは加藤周一だけでなく、川端康成などの文学者や評論家にも当てはまる。

[11] 浅川淳「文芸部史」『向陵誌　駒場篇』一高同窓会（1984）441 頁

5.　「校友会雑誌」は、ほとんど編集者自身とその周辺の人々の同人雑誌に似ていた。

・『向陵時報』に掲載された評論や文芸作品をきっかけに、『校友会雑誌』でも掲載が認められ、その中から次期文芸部員が決まる[12]

→『向陵時報』の投稿者が、『校友会雑誌』の投稿者に移る構造

6.　私は三学年のはじめに、庭球部を退いて、その編集者の一人になった。

●　一高での加藤周一の文筆活動

・1936 年 12 月（1 年生）:『向陵時報』に映画評、劇評を発表し始める

映画演劇研究会による活動の一環？[13]

・1938 年 1 月（2 年生）:『向陵時報』に小説（「小酒宴」）を掲載する

・1938 年 4～5 月（3 年生）：庭球部を退部[14]

『校友会雑誌』の編集委員、文芸部委員となる

7.　その頃の駒場でものを書き、あるいは将来書くことに関心をもっていた学生のほとんどすべてを知るようになった。

・『校友会雑誌』の編集委員として、投稿された原稿を評価し、教師との折衝を通じて掲載する立場に

例：相沢英之の回想

最初、二年で書いたときには（……）加藤周一に落とされたんです。それで加藤のところに行って「何で載せてくれないのか？」と聞いたことがあります。そしたら加藤が「文芸部担当の沼沢教授が『この原稿は駄目だ』といった」と[15]。

8.　彼らのなかには、弾圧の時代に生きのびてきた少数のマルクス主義者がいた。

●　旧制高校でのマルクス主義の広がり

・1917 年のロシア革命と 1922 年のソビエト連邦の成立をきっかけにしたマルクス主義への関心

・キリスト教（カトリック）を通じた社会的弱者への救済活動の中で、貧困や差別などの資本主義の行き詰まりを説明するための視点として、社会主義、延いてはマルクス主義が受け入れられる

→洋書を読む事ができた学生（旧制高校、帝国大学）を中心に受け入れられる

・活動内容…「研究会」を中心とした読書会、ストライキの主導

---

[12] 長谷川泉『嗚呼玉杯 ： わが一高の青春』至文堂（1989）122 頁

[13] 「前進座研究所訪問」（『向陵時報』昭和 13 年 2 月 1 日号 2 頁）には、映画演劇研究会の活動を報じる中で、「会員（……）加藤周一のメムバーはそれぞれ昨年来時報上に殆ど毎号の如く映画または演劇の批評を発表しつづけて来た。今後もこの方針は続けて行くつもりである。」と、加藤をはじめとする映画演劇研究会の会員が定期的に『向陵時報』に劇評、映画評を掲載したことが分かる。

[14] 「庭球部」『向陵誌　駒場篇』一高同窓会（1984）1094 頁

[15] 相沢英之（述）伊藤隆, 清家彰敏（監修）中澤雄大（編）『回顧百年――相沢英之オーラルヒストリー』かまくら春秋社（2021）、30 頁

・しかし、共産党弾圧と活動の非合法化にともない検挙、退学処分が行われる
・弾圧は 1931 年をピークとして、その後は減少。1935 年以降は表面的には検挙されなくなる

● 一高でのマルクス主義の広がり[16]

・1919 年「社会思想研究会」の創立以降、マルクス、エンゲルスの著作をもとにした勉強会を通じて社会問題と社会思想を研究し、「自己の省察」に活かすことを目的に活動
・ストライキはしなかったが、研究会を通じた思想の受容、非公認の新聞（『自由の柏』）の発行、共産党への加入を行う
・1925 年に制定された治安維持法に基づき、一高でも「社会思想研究会」が弾圧され解散、地下組織化
・1929 年から地下組織のメンバーが摘発され始める
・その後 6 年にもわたり、特高〔特別高等警察〕によってマルクス主義や社会主義に少しでも関わった学生を、国家と国体に対する重大な反逆者と見なして追及、逮捕
・学校側でも、退学処分を含む 130 数名の学生を処罰する

例：経済学者、小野義彦（1914-1990）の体験[17]

・一高在学中（1931-1933）に、英語で書かれたマルクスの要約本をきっかけにマルクス主義を知る
・地下組織に所属しつつ、読書会とデモへの参加、『赤旗』の配布を担当
・1933 年に逮捕され、3 か月間拘留される
・釈放後、退学処分を受ける

・加藤周一在籍時には、マルクス主義に影響された学生運動は存在せず[18]
・しかし、秘密裏にマルクス主義を学ぶ動きや評論中に入れ込むものも

例①：相沢英之の回想

相沢：マルキシズムはないですね。（……）およそマルクスという字がついたものは発禁。（……）
伊藤：でも寮のなかにはあったでしょう
相沢：ありましたよ。僕は読書会をやりましたからね。ただ、『マル・エヌ全集[19]』をこっそり集めている本屋が横浜にもあって、その本屋で何十冊と買いました。

例②中西哲吉[20]の評論[21]…『平家物語』を論じる際の視点として階級の問題が出てくる

当時の歴史を回想して誰もが気付くべき大特色は一つは生産面の階級的な無視、黙殺と云うことであり、一つは従って教育の跛行的[22]傾向と云うことであろうと思う。（……）当時教育を受け得たものは先ず僧侶であり貴族であり、次に（……）貴族に隣りする一階級[23]（……）それ等少数階級者だけであ

---

[16] 一高自治寮立寮百年委員会『自治寮六十年史』一高同窓会（1994）175-176 頁
[17] 小野義彦『「昭和史」を生きて ： 人民戦線から安保まで』三一書房（1985）29-34 頁
[18] 加藤周一『過客問答』かもがわ出版（2001）124 頁
[19] 『マルクス＝エンゲルス全集』（Marx-Engels-Gesamtausgabe）か？
[20] 中西哲吉（1921-1945）愛媛県出身。一高、東京帝国大学経済学部に進学。一高時代に『向陵時報』、『校友会雑誌』に寄稿。帝大在学時にマチネ・ポエティクの同人になる。学徒動員にともないフィリピンに出征。同地にて戦病死。
[21] 中西哲吉「ほろび」『向陵時報』昭和 13 年 12 月 12 日 2 頁
[22] つりあいのとれていない状態のまま、物事が進行していくこと
[23] 武士のことか

った。所謂唯物史観的な生産面に従事する平民以下のものには教育、知識は永久に得られざるものであった。（……）このことは実に平安四百年、貴族をして徒に花鳥風月に感傷の涙を流さしめ、恋愛文学を生み、もののあはれを育むことを得しめた大きな原因と見なければならない。だから貴族の世界は貴族自身の世界であり、平氏のそれは殆ど勘定にいれてゐなかったに違いない[24]。

● 加藤周一とマルクス主義との関わりは？

・マルクス主義への興味はあったことが確認できる

例①：「文学的自伝のための断片」『群像』14 巻 10 号（1959）230-231 頁

私はいくさの前にマルクス主義の本を少しばかりよんだ事がある[25]。たしかにこれは「洗礼」というほどのものではない。現に私は共産党とどういう関係をもたなかったばかりでなく、共産党の指導者の名まえさえ知らなかった。（……）私が少しばかりよんだマルクス主義の本は、日本の中国侵略戦争が「王道をひろめる」とか何とかいう偉そうなことではなく、要するに植民地獲得のためのいくさであり、「資本主義最後の段階としての帝国主義」のいくさの典型的なものだということを理解するには、十分に役立った。

例②：「マルキシズム」『青春ノート 3』（1939）[26]

・日中戦争後にマルクス主義者が「我々は日本人である」という理由から「転向」したことを受け、インテリがなぜマルクス主義に惹かれ、そして離れていった理由を「論理的伝統」の不在に求める

➢ 「論理的伝統」の不在に対する問題意識は、戦争体験を経ることによって、
「なぜ日本では普遍的な抽象的思考が根付かなかったのか」という問題意識に引き継がれる

9. そのひとりは、戸坂潤を尊敬し、大森義太郎を愛読し、三木清に強い関心をもちながら、文壇の全体と京都の哲学者たちを徹底的に軽蔑していた。

● 人名解説

・戸坂潤

昭和時代前期の哲学者。1900 年生まれ。大谷大学教授、法政大学講師。唯物論研究会を組織、雑誌などでファシズム批判を展開。1938 年治安維持法により検挙され、1945 年 8 月 9 日長野刑務所で獄死。東京出身。京都帝大卒[27]。

・大森義太郎

大正～昭和時代前期の経済学者、評論家。1901 年生まれ。1924 年東京帝国大学助教授。マルクス主義者として雑誌『労農』の創刊などに参加。1928 年三・一五事件[28]に関連して辞職。1937 年人民戦線事件で

---

[24] マーカーは発表者によるもの

[25] 加藤は 1930 年代後半にも、岩波文庫の『資本論』やレーニン『資本主義の最近の段階としての帝国主義』が売られていたと回想している。（加藤周一『過客問答』131 頁）

[26] 加藤周一「マルキシズム」『加藤周一　青春ノート』人文書院（2018）57 頁

[27]「戸坂潤」『日本人名大辞典』

[28] 1928 年 3 月 15 日に日本共産党に対して行われた大弾圧。共産党幹部、同党員および同党支持者など約 1600 名が逮捕、検挙された。

検挙された。1940 年 7 月 28 日死去。神奈川県出身[29]。東京帝国大学経済学部卒。
・三木清
大正～昭和時代前期の哲学者。1897 年生まれ。西田幾多郎、ハイデッガーらに師事。1927 年法政大学教授となり、唯物史観の立場から哲学を論じた。1930 年に治安維持法違反で検挙、1945 年に再検挙される。1945 年 9 月 26 日獄死。兵庫県出身。京都帝大卒[30]。
→いずれも、**マルクス主義の影響を受けた立場から評論を書き、戦中に弾圧された人物**
● 「文壇の全体」…1930 年代の文壇＝「文芸復興」期
・特徴[31]…『文学界』などの文芸雑誌の創刊
芥川賞などの文学賞の制定
永井荷風など、大家となっていた作家の再評価
背景…プロレタリア文学の衰退
大衆文学（吉川英治『宮本武蔵』など）の進出に対する危機感
→横光利一を中心に、**新たな表現方法によって、文学が生活に対して感動を与えることが重視される**

・主要な流れ…「新感覚派」、「日本浪漫派」

・「翻訳文学」の影響を受けた「新感覚派」の流行
・「翻訳文学」…フランス文学が翻訳され、「新たな表現」として評価される
・「新感覚派」…「翻訳文学」の影響のもと、作家の人格と心情、情景を目に見えるように表現することを重視する私小説に対し、既存のものとは異なる新たな表現を模索する
例：横光利一…関東大震災後に東京が復興する中で、機械文明と人間との関わりを扱う
「頭ならびに腹」（1924）…（あらすじ）
原因不明の線路の故障によって特急列車が止まり、乗客に駅へ引き返すための列車が来ることが告げられる。小僧以外の乗客は、腹の出た「ブルジョワ金満家」の判断をきっかけに、新たに来た列車に乗って引き返す。しかし故障はすぐに直り、残っていた小僧だけを乗せた列車が進む
→「資本主義」の欲望を体現する「腹」の出た「ブルジョワ金満家」に、「頭」による判断をゆだねる「群衆」の姿を表現[32]
・無機物を比喩に使う
「頭ならびに腹[33]」（1924）…「真昼である。特別急行列車は満員のまま全速力で馳けてゐた。沿線の小駅は石のやうに黙殺された。」
・一高生の間でも読まれる
例：相沢英之の回想

---

[29]「大森義太郎」『日本人名大辞典』
[30] 「三木清」『日本人名大辞典』
[31] 東郷克美「文芸復興期の模索」『時代別日本文学史事典　現代編』有精堂出版（1997）101 頁
[32] 杉野要吉「関東大震災と文学」『時代別日本文学史事典　現代編』有精堂出版（1997）23 頁
[33] 「青空文庫」を参照（https://www.aozora.gr.jp/cards/000168/files/2158_23275.html）

私らがあの頃一番一生懸命読んでいたのは例えば横光利一などの新感覚派、伊藤整なんかもよく読まれていましたね[34]。

・加藤も例外ではなく、横光を読んでいる…批判のポイントは後述

・「日本浪漫派」…同人雑誌「日本浪漫派」(1935～1938 年) を中心とした復古的な浪漫主義の文学運動。文芸評論家の保田与重郎、亀井勝一郎、作家の太宰治、詩人の萩原朔太郎などが参加。自然主義的な身辺雑記の写実小説を批判し、退廃、西洋模倣の日本的近代への批判に基づく古代へのあこがれを表現[35]。

例：保田与重郎…マルクス主義を経て、ドイツ・ロマン派へ接近

『万葉集』などの古典や日本武尊などの古代の人物を取り上げた評論

● 「京都の哲学者たち」＝「京都学派」

大正・昭和期の京都大学を中心とした学派。

西田幾多郎の影響を受けた、京都大学哲学科の高坂正顕・高山岩男・西谷啓治らおよび史学科の鈴木成高が、西洋文化と東洋文化の対立を乗り越える哲学を研究・発表し、ジャーナリズムに進出して時事問題に発言した。

特に 1942 年に『中央公論』に掲載された上記四名の座談会「世界史的立場と日本」「東亜共栄圏の倫理性と歴史性」、翌年の「総力戦の哲学」は、「大東亜戦争」の哲学的合理化として注目をあびた[36]。

・「京都学派」に対する加藤の評価…「**現実との接点との無さ**」を批判

例：『日本文学史序説』

広汎な西田哲学の影響の大きな理由の一つは、おそらくその文体の心理的な側面にあったろう。日本の多くの読者は、概念の厳密さや議論の論理的斉合性よりも、しばしば論法の心理的な効果を好むのである。たしかに西田その人には、鈴木大拙のそれと通うところの禅的な経験があり、それは具体的で確実な、その人の人格の中心と現実との接点であった。しかし西田以後の「京都学派」には、それがなかったか、少くとも西田の場合ほど確乎としたものではなくなっていったようにみえる[37]。

・なぜ、その一高生は文壇全体と「京都学派」を「軽蔑していた？」…言葉と現実とのつながりの無さ

---

[34] 相沢英之（述）伊藤隆，清家彰敏（監修）中澤雄大（編）『回顧百年――相沢英之オーラルヒストリー』かまくら春秋社（2021)、31 頁

[35] 大久保典夫「日本浪曼派」『日本大百科全書（ニッポニカ)』(*JapanKnowledge*, https://japanknowledge.com）,（参照 2021-12-16）

[36] 「きょうとがくは【京都学派】」『国史大辞典』(*JapanKnowledge*, https://japanknowledge.com）,（参照 2021-10-13）

[37] 加藤周一『日本文学史序説　下』

下線部は発表者によるもの。

10. またもっと教壇的な学問に熱心な学生もいた。

・教壇的？教室で教えられるような学問のこと？

11. 一部の学生は、ドイツ観念論の煩瑣な概念を操作しようとしていたし、また別の学生たちは、まえにも触れたように、「万葉集」を原文について読もうとしていた。

● ドイツ観念論の煩瑣な概念＝カントか？

・昭和 10 年代の『校友会雑誌』にはカントの概念を取り上げた評論が多くみられる

例：大石好武「カント認識論に於ける問題の諸契機――分析判断と綜合判断との問題を媒介として」『校友会雑誌』362 号

● 「『万葉集』を原文について読もう」とする学生

・「戯画」で既に触れたため、加藤と『万葉集』との関わりは省略

・昭和戦前期の『万葉集』の位置づけ

・昭和初期から、日本は近代化を達成したという自負の下、文学者や知識人の間でそれまでの西洋文化重視から日本文化に回帰する流れの中で、日本文化の優秀性や民族的美質を表現した作品として『万葉集』が位置づけられる[38]。

例：斎藤茂吉『万葉秀歌』など、万葉集に関する本が盛んに出版

・1935 年の「国体明徴運動」の中で、『古事記』、『日本書紀』とともに「軍国日本の聖典」に祭り上げられる、日本人が先祖代々発揮してきた忠君愛国精神を表現したものとして喧伝される[39]

・加藤が参加していた国文学会でも『万葉集』が取り上げられ、五味教授による講読会や佐々木信綱による講演会が開催される

例：「万葉その他」『向陵時報』昭和 14 年 6 月 26 日 5 頁

国文学者、佐々木信綱を招聘し「万葉の春」の題で講演。国文学史おいて記紀歌謡の時代を「冬ごもり」、万葉集の時代を上代の国民の若々しい至純なる力強い精神情操から生まれた「春さき来れば」の時期とする。長い間に万葉集の基礎は出来たこれから伝道を築き上げるのは若い者の力である。今日は種々の方面から日本精神を研究し高揚される。万葉を研究するのは今日何よりも大切である。

12. また詩人もいた。立原道造や中原中也や宮沢賢治に傾倒し、前世紀末今世紀はじめの頃の欧洲殊にフランスの詩を読んで、誰にもわかり難い詩を書いていた。

・立原道造、中原中也… 同時代の詩壇で評価され、加藤が好んで読んでいた詩人

・宮沢賢治…没後（1933 年以降）から自然に囲まれ、「文芸復興」期の目的に合う、豊かな生活を送った詩人として再評価[40]、加藤が読んでいたかどうかは不明

---

[38] 品田悦一「『万葉集』の近代―百三十年の総括と展望」『「国書」の起源 ： 近代日本の古典編成』新曜社（2019）136 頁

[39] 上同、140 頁

[40] 構大樹『宮沢賢治はなぜ教科書に掲載され続けるのか』大修館書店（2019）61 頁

・昭和時代以降のフランス文学・詩の流行
　・日本におけるフランス語詩は、大正時代に上田敏を中心として、象徴主義の影響を受けた詩が紹介
　・昭和時代には、堀口大学によるフランス語詩の訳詩集『月下の一群』（1925 年刊行）
　　新たな詩の表現として注目される
・昭和時代以降の詩の流行…様々な立場から「新しい」詩の可能性が追及される
　・プロレタリア詩
　・フランスでのシュールレアリスムの影響を受けた超現実派

13. 小説家には、徳田秋声を祖として、いわゆる「自然主義私小説」を試作する者があり、太宰治を範として、酒と女に溺れ、または溺れるかのように構え、折にふれてその見聞を綴ろうとする者があった。

● 徳田秋声（1872～1943）

自然主義文学の代表的作家。
・加藤による評価…
　自身の経験をそのまま記録することが、人生の「真実」を忠実に表現するものとする「自然主義」の小説家の一人[41]

● 太宰治（1909～1948）

・加藤による評価…
　太宰の「私小説」は、津軽の旧家の自負と失敗の居直りの証言であり、挫折した人生の美化と自己陶酔の記念碑である。しかし病身で、意志薄弱で、虚栄心が強く、感受性の鋭敏な人生の崩壊過程を、これほど見事に描きだした小説は他にない。もちろんそれは作者の私生活とのみ係り、大日本帝国の運命と係るものではなかった。しかし敗戦直後、帝国の陽が沈もうとしていたときに、太宰は『斜陽』を書き、独立国家として日本が失格していたときに、『人間失格』を書いたのである[42]。

→いずれも、（戦前の活動に対しては）加藤は評価していなかった作家

● 一高内での「自然主義私小説」

・『校友会雑誌』、『向陵時報』に、自身の体験に基づく私小説風の小説が掲載される
　※加藤も同様

例：「従兄弟たち」『校友会雑誌』363 号（1938）
（あらすじ）…加藤の幼少期における、祖父の葬儀での従兄弟たちの振る舞いから、自身の中にある
　　「エゴイズム」を自覚する
・後に、自身の心情表現を重視する加藤の「小説観」とのズレを自覚する

14. またあるいは「人民文庫」と「文学界」の双方を気にしながら、西洋の小説を読み漁り、そのどこかに小説の理想をもとめようとする者もいたのである。

● 『人民文庫』

---

[41] 加藤周一『日本文学史序説　下』筑摩書房 359
[42] 加藤周一『日本文学史序説　下』筑摩書房 514

文芸雑誌。1936 年（昭和 11）3 月～38 年 1 月。高見順らプロレタリア文学系の作家たちを主な執筆グループとし、『日本浪曼派』など、文化統制的、超国家主義的傾向に反発した[43]。

● 『文学界』

文芸雑誌。1933 年（昭和 8）10 月～44 年 4 月。小林秀雄、川端康成らを同人として創刊。小林と河上徹太郎を中心に同人を拡大して昭和 10 年代文壇の一大勢力となった。のち日本主義的傾向を示し、日本浪曼派の活躍が見られた[44]。

→傾向は両極端に異なるが、1930 年代に人気を博した文芸雑誌[45]

（加藤は『文学界』は読んでいた[46]ことがわかる、『人民文庫』については不明）

● 「西洋の小説を読み漁り、そのどこかに小説の理想をもとめようとする者」とは？

考えられる一高生のパターン①…西洋の小説から人生の指針を得ようとするもの

・自我に目覚め、どのように人生と生きるべきかという問題に悩む一高生

→「濫読」が奨励される

・西洋の小説の翻訳を通じた流入…フランスやロシア、ドイツ文学が好んで読まれる

例①：相沢英之の回想

フランスのものだと、アンドレ・ジイドですね。ロシアものは日本人は好きですからね、トゥルゲーネフやチェーホフに始まってトルストイ、ドストエフスキー、ゴーリキー、ゴーゴリとかを読みました。（……）結局その頃はロシア文学に始まって、ドイツのゲーテやトーマス・マンなんかはさかんに読みましたね[47]。

例②：昭和 10 年に行われた一高生の読書アンケート[48]

・ドストエフスキー『罪と罰』、トルストイ『復活』、『クロイツェル・ソナタ』

・ゲーテ『ヴィルヘルム・マイスター』、『ファウスト』

・ロマン・ロラン『ジャン・クリストフ』

---

[43] "人民文庫", 日本大百科全書（ニッポニカ）, JapanKnowledge, https://japanknowledge.com ,（参照 2021-10-13）

[44] "文学界", 日本大百科全書（ニッポニカ）, JapanKnowledge, https://japanknowledge.com ,（参照 2021-10-13）

[45] 中村眞一郎『戦後文学の回想　増補版』（1983）13-14 頁

「昭和十年代のはじめの文学少年にとって、現代文学の主流は「文学界」に拠る作家たちだった。小林秀雄は神々の中心として仰ぎ見られていた。（……）これら「文学界」の作家たちと、私たち文学少年との間に、当時の文壇は前衛として二つのグループを突きだしていた。ひとつは「日本浪漫派」であり、もうひとつは「人民文庫」である。」

[46] 加藤周一「Fragménte」『青春ノート 3』（https://trc-adeac.trc.co.jp/Html/ImageView/2671055100/2671055100200010/seishun_note3/?p=6）

[47] 相沢英之（述）伊藤隆, 清家彰敏（監修）中澤雄大（編）『回顧百年――相沢英之オーラルヒストリー』かまくら春秋社（2021）、31, 33 頁

[48] 一高自治寮立寮百年委員会『自治寮六十年史』一高同窓会（1994）343-344 頁

→人生の指標として読書をする（教養主義に基づく）

考えられる一高生のパターン②…西洋の小説から「新たな表現」を模索する一高生
（当時の文壇と同じ流れ）
・一高時代に加藤が読んだ西洋の文学…翻訳されたものを手当たり次第に読む中で（後に）ヴァレリーに衝撃を受ける[49]
→「文学」が物語や感情の表現だけでなく「世界を認識する意識の構造」も対象にできることを発見[50]

- **これらの学生の群像は、加藤と共通するところが多いため、当時の学生の様子でもあり、加藤自身の姿でもある**

第 3 パラグラフ（旧版 149～150 頁、改版 168～169 頁）

しかし駒場の学生と東京の文士論客との間には、決定的なちがいもなかったわけではない。私たちは文筆を業としてはいなかった。ものを書くことによって妻子を養う必要はなく、むしろ逆に親から養われて、何の障害も感じていなかった。学問や文芸や思想の商品化が何を意味するかを、私たちは、自分自身の経験としては、全く知らなかった。文章の商品化、商業的な新聞や雑誌を通じての大衆との接触、従って政治権力の介入、同時に新聞雑誌の自己検閲とそれに伴う大衆の嗜好の変化、その大衆の変化への新聞雑誌の側からの適応、その全体を包む時代の流行に従わないことによって文筆業者が感じるだろう生活上の脅威、またそれに従うことによって感じるだろう自己の立場の正当化の必要…そういうことのすべてを私たちは知らなかったから、私たちには、時代と共に流されてゆく文士論客の節操の無さと、それを正当化しようとする彼らの理くつのつじつまの合わなさ加減だけが、めだってみえた。私たちは抽象的で無慈悲な批判者であった。

- 構造

生活とのつながりから世相に順応する文学者⇔それを批判する生活とかかわりのない学生
→「生活」との関わりを軸にした両者の対立

「生活とのつながりから世相に順応する文学者」＝マルクス主義から転向した文学者
戦争賛美のために動いた文学者
→「転向作家」
例：『転向 ： 共同研究』で取り上げられている作家…島木健作、亀井勝一郎、埴谷雄高、山本有三
→いずれも、マルクス主義や日本共産党の運動にかかわるが、「転向」して日本賛美、あるいは無関心へ
・加藤による「転向」への評価
　・一高時代の加藤による「転向」に対する問題視…「マルキシズム」にて既述
　・戦後の加藤…「転向」せず、一貫した思想を持った人物を高く評価

---

[49] 加藤周一「フランスから遠く、しかし……」『「羊の歌」余聞』筑摩書房（2011）82 頁
[50] 岩津航『レトリックの戦場　加藤周一とフランス文学』丸善出版（2021）17 頁

例：河上肇[51]…マルクス主義を学問的信念として扱うことで、それを否定し「転向」するためには学問の自由と資料が関係する問題とする。これによって、日本の国益や家族などの要因によって「転向」することがなかったことに対して、「この点における前後一貫性は、河上の知的誠実にほかならない」と評価

・「転向」という現象を、思想と人格という日本文化と深く絡んだ問題とする[52]

学生…ものを書くことによって妻子を養う必要はなく、むしろ逆に親から養われて、何の障害も感じていなかった。学問や文芸や思想の商品化が何を意味するかを、私たちは、自分自身の経験としては、全く知らなかった。
→生活との隔絶

文学者…文章の商品化、商業的な新聞や雑誌を通じての大衆との接触、従って政治権力の介入、同時に新聞雑誌の自己検閲とそれに伴う大衆の嗜好の変化、その大衆の変化への新聞雑誌の側からの適応、その全体を包む時代の流行に従わないことによって文筆業者が感じるだろう生活上の脅威、またそれに従うことによって感じるだろう自己の立場の正当化の必要
→生活との関連

- 語句解説

学問や文芸や思想の商品化
・昭和時代に入ると、出版社によって学術本が安値で売り出される。
例：岩波文庫
→学生やサラリーマン、地方の青年層にまで影響力を与える（いわゆる「岩波教養主義」）
・総合雑誌（『改造』、『文芸春秋』、『中央公論』）において、評論、文芸欄が掲載され

商業的な新聞や雑誌を通じての大衆との接触
・出版社と読者との交流が盛んになる
例：投書欄、新聞社あるいは出版社主催の講演会
→読者の好みに合わせた内容で出版する
・同時代の文学界の問題として、「大衆」との関わりが取り上げられる
例：大衆小説（吉川英治『宮本武蔵』など）に対する脅威

政治権力の介入、同時に新聞雑誌の自己検閲とそれに伴う大衆の嗜好の変化
・新聞雑誌の検閲は明治時代から行われていたが、昭和時代に入ると、社会的不満やマルクス主義から目

---

[51] 加藤周一「転向または『獄中贅語』の事」『朝日新聞』1976 年 4 月 16 日〔『著作集 15』（1979）〕193 頁

[52] 加藤周一，鶴見俊輔『二〇世紀から』潮出版社（2001）111-112 頁

をそらさせる目的で「エロ」関係は見逃されるなど、大衆の嗜好を検閲によって操作する動きが現れる[53]

その大衆の変化への新聞雑誌の側からの適応
例：『新青年』…当初は青少年向けの教養総合雑誌だったが、傍らに掲載された探偵小説が編集者と読者の好みに合致したため、方針を転換して、探偵小説・推理小説を中心とした雑誌になる
　その後、日中戦争をきっかけに右傾化。探偵小説・推理小説は掲載されなくなる。
→時勢や大衆の人気によって記事内容を変化させる

その全体を包む時代の流行に従わないことによって文筆業者が感じるだろう生活上の脅威、またそれに従うことによって感じるだろう自己の立場の正当化の必要
・「転向」の論理[54]
①　戦争が始まった以上、負けてはならないから
②　国民の大部分が苦しんでいるのにも関わらず、自分だけ安閑としていられないから
→日本のため、民衆のために変わったという信念に従う

そういうことのすべてを私たちは知らなかったから、私たちには、時代と共に流されてゆく文士論客の節操の無さと、それを正当化しようとする彼らの理くつのつじつまの合わなさ加減だけが、めだってみえた。
・同時代の「転向」する人々に対する青年層の反応
例：中村眞一郎…守るべき社会的地位、家庭を持たない青年層の見方[55]
変わった人々に対する反発⇔変わらなかった人に対する尊敬

- 「私たちは抽象的で無慈悲な批判者であった。」

・学生による実生活とのかかわりを考えない、理屈だけの批判
・鶴見俊輔による「転向批判者」に対する意見を受けてのことか？

> 転向問題に直面しない思想というのは、子供の思想、親がかりの学生の思想なのであっていわばタタミの上でする水泳にすぎない。就職、結婚、地位の変化にともなうさまざまの圧力にたえて、なんらかの転向をなしつつ思想を行動かしてゆくことこそ、成人の思想であるといえよう[56]。

➢ **生活との隔絶は「星菫派批判」など、戦時中のインテリに対する批判の視点となる**
　しかし、それは自己批判的な記述となる

---

[53] 『講座日本歴史 10（近代 4)』（1985）東京大学出版会
[54] 中村眞一郎『戦後文学の回想　増補版』（1983）42 頁
[55] 上同 42 頁
[56] 鶴見俊輔「序言」『転向 ： 共同研究　上巻』（1959）〔『転向 ： 共同研究　1 戦前篇　上』平凡社（2012）25 頁〕